

< 川越市 >

川越市「小江戸蔵里」指定管理者問題

市長選 < 17日告示 24日選挙 > 直前の1月15日、

川合市政 = 宍戸副市長らが「3月議会へ怪しげな根回し！」

昨年12月の川越市議会で、川越市産業観光館「小江戸蔵里」(通称・蔵里)の新規指定管理者として選定されたTKM株式会社(以下「TKM」)は、議会の全会一致で否決された。その直後、昨年12月17日の時点で、川越市ホームページには、蔵里の令和3年4月1日以降の運営が「未定」のため「当分の間休止」が広報された。



Kawagoe City
川越市

小江戸蔵里（産業観光館）の利用申請を受付けています。

更新日：2020年12月17日

- 令和3年4月1日以降の産業観光館の運営が未定のため、施設内の会議室、ギャラリー、広場の利用予約につきましては当分の間休止させていただきます。
いつもご利用いただいている皆様にはご理解、ご協力くださいますようお願いいたします。

小江戸蔵里（産業観光館）では、貸し出し施設（ギャラリー、会議室、広場）の利用申請を受付けています。

詳しくは、下記のリンクをご覧ください。

外部リンク

[小江戸蔵里（産業観光館）利用案内（外部サイト）](#)

※新しいウィンドウで指定管理者のページにリンクします。

そして4期目“**多選**”川合市政が幕を開けた2月8日現在でも、4月以降の蔵里運営については**白紙のまま**である。川越市の観光事業のシンボルでもある蔵里の運営が未定となる事情の説明も避けておきながら、それが当分続くなどと告示する市民不在の川合「**おれ様**」市長の尊大な態度は、市長3期目の最後まで変わることはなかった。いずれにしても旧年中の議会で時間切れとなった本件は、**次回の3月議会**に諮られ、議決を得てようやく行方が定まる問題である。

ところが、市長選直前の1月15日、**宍戸副市長と担当課・栗生田産業観光部長**が現在の蔵里の管理業者である「株式会社まちづくり川越」（以下「まちづくり」）を訪ね、4月以降の運営を**3年間の随意契約**で頼めないかと話を持ちかけていたことが本紙独自の取材でわかった。

「普通ではなかった」全会一致否決の「普通ではない」事後対応

まず、3月議会に向けた宍戸副市長らによる根回しが、市長選直前の1月15日に水面下で進んでいたこと自体に、川合市長の意図が見え隠れする。

蔵里指定管理者を「TKM」に選定した最終的な決裁者は、他にもない川合善明市長であり、市が提出した同議案が全会一致で否決された。最も衝撃を受けたのは間違いなく川合市長だろう。指定管理者の承認などは、議会における予定調和とも言うべきもので「**全会一致で可決**」されることのほうが普通だ。すなわち、市議全員が否決した本件は「**普通ではなかった**」のである。

そもそも新年度からの蔵里の新規指定管理者には、同施設の設立に尽力した商工会から始まった「**まちづくり**」が引き続き選定されるものだと、すべての蔵里関係者が信じて疑いもしていなかった。そこに新興企業の「TKM」が突如躍り出るやいなや、極めて曖昧で具体性に欠ける市の評価基準で、結論ありきの「TKM」選定が決定し、その承認議案が執行部から議会に提出された。蔵里を立ち上げた最大の功労者である「**まちづくり**」は、川合市政に寝首をかかれたも同然の出来事だった。

同時にこの不条理な選定の裏には噂が立った。「TKM」の代表者木所裕幸氏の父親木所勝邦氏は、市長選挙で川合氏の唯一の対立候補だった川目武彦元川越市議の有力支援者として知られていた。その木所氏が、昨年10月頃になって川目氏陣営から離脱したのである。木所氏から具体的な理由が語られることはなかったというが、川目氏とトラブルがあったという話は聞かれなかった。

代わりに「**表立って（川目氏を）応援できなくなった**」と木所氏が漏らしていたとの話が地元では囁かれた。そして、時期をほぼ同じくして、木所氏の子息が経営す

るホテル事業者「TKM」が突如、蔵里の指定管理者に選定されることになる。それも当初、市は議会が「TKM」を審理するうえで必要な同社の資料を120ページ余も故意に見せなかった。市議の追及で後出ししただけのことで、その資料をもってしても「TKM」が、これまでの「まちづくり」の実績を凌駕するほどの根拠は見当たらなかったのである。こんなデタラメな選定は、市長決裁という伝家の宝刀でも抜かなければ平然と議会まで上がっては来まい。

政治の世界に「偶然」はあり得ない。政治家であれば誰でも、このような話にはウラがあることを考える。だからこそその**全会一致の否決**だった。仮にも議場である以上、常識的な言葉と態度で議論されたものの、おそらく川越市議会の全員が「市長、いい加減にしとけよ」と心中で吐き捨てたのではないだろうか。

市長選直前の「ネコ撫で声」

全会一致の否決というカウンターパンチを喰らった川合市政は、すかさず事後対応に取りかかった。なにしろ多選自粛を葬ってまで出馬する川合氏にとって、蔵里問題は選挙の当落に影響しかねないほどの、川合市政の「不祥事」とさえ言っていたいい大失態だった。1月15日、市長選挙告示の直前のことであった。

宍戸副市長と栗生田産業観光部長は「まちづくり」を訪れ、改めて4月から**3年間の随意契約で蔵里の指定管理者**をやってもらいたい旨の話を切り出したという。

「まちづくり」関係者が本紙の取材に応じた。

「まちづくり」関係者

私らにしてみれば、指定管理者を引き受けることに関して、一抹の不安はありますよ。前回の公募のときに「まちづくり」は選定されなかった。

選定された「TKM」さんも議会で承認されなかった。

ですから「まちづくり」として、宍戸副市長と栗生田部長に対し「本当に議会は承認してくれるのか」と何度も念押しをしたくらいです。

なるほど、「まちづくり」の不安は当然だろう。「TKM」のほうが高く評価されて指定管理者に選定されてから議会全会一致否決まで、わずか約2カ月のことではない。「TKM」が議会で否決されたからといって、その「TKM」より劣るから選定しなかったはずの「まちづくり」に、一転して**ネコ撫で声で話を持ち込む副市長ら**を信用するわけにはいかないというのが「まちづくり」関係者らの本音だろう。

本紙は商工会関係者の話も聞いたが、中には「**背中から人を斬っておいて、議会でそっぽを向かれたら頼みに来るなんて、人をナメるにもほどがある**」と怒気を隠さない御仁もいた。これは本紙の推論に過ぎないが、市が付け焼き刃のごとき事後対応を急いだことも、もちろん**川合4選直前**という時期と無関係ではないだろう。

結果、「まちづくり」は役員会を開き、4月からの指定管理者を引き受ける申請書を2月1日に市へ提出した。だが市の執行部からすれば、選挙告示前の火消しの意味で「**市が頭を下げて頼みに来た**」となれば商工会を含めた「まちづくり」関係者も一応は溜飲を下げるかもしれないとの、人を小馬鹿にした考えであったのかもしれない。ちなみに、市の担当課に聞いたところ「**新たな指定管理者選定を公募で行うとなると、およそ1年の期間を要する**」とのことだ。

現在、市が公告したままの「**4月以降は当分の間休止**」という情けない状況を脱して、市民と観光客の需要に応えるためには、「まちづくり」に改めて指定管理者をお願いするという市の選択は妥当のように思える。

しかし実際には、**川越市**（より正しく言えば、決裁権者である川合市長）が「まちづくり」は「TKM」より劣ると判断した後のことなのだから、仮に蔵里の1年休止を余儀なくされたとしても、それはすべて**川合市長の政治責任**に帰する問題でしかない。何よりも自分の都合が優先する川合市長は、議会での全会一致否決をみて、自らに降りかかる火の粉を払うためには、自らが排除した「まちづくり」を逆用することなど意に介さないのだろう。

「無所属市議」を「除外した川合市政」

話はそれだけではない。1月15日の時点でノコノコと「まちづくり」にやって来た**央戸副市長と栗生田産業観光部長**は、議会承認への不安を口にした「まちづくり」側に「**議会にはお願いをしておりますから、大丈夫です**」と言明したというのだ。

「まちづくり」は念のためにと何度も確認したが、副市長らは「**議会に話しておりますから大丈夫です**」という旨の回答に終始した。

しかしこれは副市長らによる、恣意的かつ悪質な虚偽発言と言わざるを得ない。なぜなら、議会どころか委員会もまだ開かれておらず、それ以前の問題とし

て、市が「まちづくり」に依頼する方向で調整するという件を、議員全員が聞いていたわけではなかったからだ。

実際には市から話を聞いたのは正副議長と会派代表市議で、無所属の3名の市議には知らされていなかったのである。「全会一致」で否決された蔵里議案の、市の執行部による軌道修正であれば、全市議への打診が当然であろう。

本件は普通の承認議案とは違う。通例の根回しであれば、正副議長・会派代表に伝達するだけでも問題ではないが、本件は「全会一致で否決」された議案の事後対策だ。市の執行部は、事態を重く受け止めて対策を進めなければならないというのに、無所属議員にまで事前の声がけなどする筋合いはないということだろうか。トップが何事も誠実に受け止めたことがない川合市政では、なにが起ころうがお構いなしのようだ。与党会派さえ抑えておけば、少数の無所属市議は無視しても問題はないとでもいう川合市政の傲慢は、川合氏が中身のない薄っぺらな選挙演説を始める3期目市長最期の時期でも留まることを知らなかったのである。

「まちづくり川越」の想い

前述したが「まちづくり」は2月1日に、蔵里の指定管理者を引き受ける申請書を川越市に提出した。しかし彼らは決して、市の依頼を二つ返事で受けたわけではない。前出「まちづくり」関係者は、指定管理者としての公募落選から議会の「TKM」否決、そして急転直下の市からの依頼という、この間の想いを語ってくれた。

「まちづくり」関係者

4月からの契約期間の3年間で「まちづくり」としては、どのようなことをやっていくべきなのか。再選を果たした川合市長はどのような街づくりをし、「まちづくり」をどのような方向にもっていこうと考えているのか。

「まちづくり」は、川越市とそのような議論をしっかりとした上で、蔵里の指定管理者を引き受けたいという考えでしたが、川越市からの依頼は、

あまりにも急で時間が少なく、綿密な議論もできないまま、指定管理者を受け申請書を市へ提出しました。

もし「まちづくり」が市の依頼を引き受けなければ、4月から蔵里は閉館したままになり、川越の産業と観光のための施設としての機能は失われる。川越市としては恥ずかしい。だから、「まちづくり」は、川越市（役所）のためではなく川越（街）のために引き受けたのです。

「まちづくり」は、役所のためではなく、まして当初の選定を議会で否決された本件問題の元凶・川合善明市長を救うためでもなく、小江戸一川越を誇りに思う市民の思いから、蔵里の指定管理者を引き受けた。

もともと川越市の要請を受けた商工会議所を筆頭とする市民の心を寄せて設立された「株式会社まちづくり川越」は、前回公募でまるで用済みのごとく切られ、川合市政の画策した「TKM」の選定が川越市民の全民意によって否決されたら「やっつけ対応」よろしく副市長らが駆けつけ臆面もなく「お願いします」と言っただけ。 「まちづくり」にとって、本来はこれほどの屈辱はないだろう。

だが、その不条理さえ呑み込んで、川越という街を想う「まちづくり」の心が蔵里休止の危機を救うことになるのだろう。現状では、次回3月議会で蔵里の指定管理者は「まちづくり」で承認される。

市の担当課や川合市長は、この問題の責任から逃げおおせたという見当違いの達成感に安堵しているだろうが、2月19日から開会する3月議会では、各市議から川合市長の政治責任と政治姿勢について厳しく追及されなければならない。